

NPO法人「森と海の学校」主催の「子ども自然体験スクール」に参加した高木真琴さん（常盤中学2年生）が平成25年度「全国少年の主張」中四国地区代表として全国大会に出場しました。

【全国少年の主張発表文】『手紙の力』

引き出しの奥にあった便箋。最近では手紙を書くことはありませんでした。携帯電話があれば友達への連絡も、「ありがどう」「ごめんね」の言葉も指先で簡単に伝えられるので、不自由なことはありません。返事もすぐ返ってきます。

考えてみると、年賀状でさえ手書きの物は少なくなりました。

挨拶文も住所も印刷され、手書きのメッセージが一文あればいい方です。慌ただしい年末に、心をこめる余裕もなく作業的に書いていました。

字を書いて伝えるということがなくなっていた、そんな中、春休みに行なわれた子ども自然体験スクールに参加しました。

このスクールには、携帯電話を持つていくことは禁止されています。一週間、親や学校の友達と離れ、連絡もとれません。いつものメールもできません。ですが、不思議なことに寂しさは感じませんでした。

スクール三日目の夜に、「親子の絆」について講話がありました。指導者の若い頃の体験談です。手作りヨットで単独太平洋横断を決意し、その思いを両親へ伝えた時、大変反対されたそうです。しかし、思いは強く諦めきれない。お父さんとの会話もなくなり、出発の日も見送りに来てくれた両親と会話することなく出航。

ところが、お母さんからのお弁当を開けた時、二枚の紙が入っていたそうです。一枚はお母さん、そして、もう一枚はお父さんからの手紙。お父さんはただ一文書いていたそうです。

「生きて帰れ」と。

このわずか五文字にお父さんの愛情を強く感じたと言われました。そして、何度も読み返し、両親への感謝の気持ちと、「行ってきます。」と言わなかったことを後悔し、涙を流したそうです。

この講話の後、一人一人に親や家族からの手紙を渡されました。突然の手紙に皆驚きました。暗い部屋の中で、懐中電灯の小さな灯りのもと、それぞれ家族からの手紙を読みました。

皆、泣いていました。私も涙があふれて止まりませんでした。中学生になり、母とよく喧嘩をして、口をきかないことも多くなりました。そんな私に母から手紙が届くとは思ってもみませんでした。驚きました。

そこには、スクールに参加させた母の思いが書いてありました。「転校したこともあり、友達関係にとっても悩んだこの一年。学校に行くことがつらかったこともあり、いつも喧嘩ばかりしていたね。そして、じきに笑顔を見せることもなくなり、暗くなる一方だったね。だから、このキャンプでたくさん楽しいことをして笑顔で帰ってきてね。」と私をげますような力強い文字でした。

私は、どうして喧嘩ばかりしていたのだろう。母の気持ちも考えずに、自分の言いたいことばかり言うてきた。それでも母は私を心配している。改めて家族の大切さを知りました。周りの友達も手紙を読んで感謝や反省をしていました。私も友達も皆涙があふれて止まることはありませんでした。

手紙のもつ力。手紙は素直な気持ちを与えてくれる。一文字一文字に心がこもっている。手紙を書いているとき、相手のことを思っている。「生きて帰れ」たった五文字で、お互いの気持ちがつながる。自分を振り返るチャンスを与えてくれる。

母の手紙がなかったら、母の気持ちなど考えることもなく反抗するばかりだったことでしょう。顔を見て言いくい時、文字が心を伝えてくれる。それは、相手のことを考えながら書き、書き間違ったら書き直すという作業の中で、気持ち「文字」に表れるからではないでしょうか。

あの日の母からの手紙がメールであれば、あれほどの感動、驚き、涙することはなかったかもしれません。毎日家事と仕事で忙しい中、手紙を書いてくれたと思うと、本当にうれしかったです。

今でもスクールの友達と手紙の交換をしています。皆、手紙のもつ力を感じたからでしょう。小学校の友達にも手紙を書いてみました。すると、手紙で返事が戻ってきたのです。忙しい中学校生活の中でも懐かしい文字と絵が書いてありました。やはり、手紙はうれしいものです。相手の顔を思い浮かべながら郵便ポストに出す楽しさも、友達からの手紙を待ち郵便受けを見る楽しさも増えました。メールも、もちろん便利ですが、手紙という古風なものだと感じています。

